

Buddhakośa

科学研究費補助金（基盤(S)）プロジェクト：
仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集（バウッダコーシャ）の構築

研究の概要

研究会の風景

目次:

研究の概要	1
同(英語版)	2
本プロジェクトに携わる研究者	3
研究会等活動報告・活動予定	4
研究報告①	5
研究報告②	6
活動報告 第61回日本印度学仏教学会学術大会パネル発表報告	10

【研究の背景・目的】

本研究は主要な用例にもとづいて、基礎的な仏教用語の意味を再考し、信頼度の高い現代語訳を提示することを目指しています。これは仏典に登場する主要な術語のもつ意味を、それぞれの原典に立ち返って再検証し、今の時代にふさわしい現代語訳（日本語と英語）を提起しようというプロジェクトです。

伝統的な漢訳語には「空」や「意識」などのように、きわめて的を射た、日本語としてもかなり定着している術語も少なくありません。しかしながら、一方でまた「集(ジュリ)」「色」「捨」や「世俗」や「戲論(ケリ)」などの訳語のように、すでに原意の理解がかなり難しくなっている術語が多いのも事実です。

このような事態の克服をめざして、本プロジェクトは、学界の衆知を集めながら、仏教の思想的な理解をより正確で、信頼度の高いものにしたいたいという発想から生まれました。♫

【研究の方法】

本研究では、各分野を代表する研究教育者が研究分担者あるいは連携研究者として参画し、それぞれの分担テーマに応じて研究班を組織して研究を進めます。

平成 23 年度から 5 年間の研究期間の中で、海外共同研究者および大学院生の協力を得ながら、研究班ごとに毎週あるいは隔週単位で研究会を重ね、年に 1 冊程度のサイクルで研究成果を公表します。

年に数回の全体研究会で意見交換と調整を行い、関連する学会発表とワークショップを経たのちに、それぞれの研究成果を冊子体と電子媒体で公開する予定です。

研究代表者はすでに、「五位七十五法」と呼ばれる、インドの有力な仏教部派であった説一切有部による法（物質的・精神的要素）の体系に関する研究をすすめて、その成果を XML（拡張可能なマーク付け言語）を用いてとりまとめ、冊子体と電子媒体とで公にしました。



本プロジェクトでは、上記の研究を通して確立した方法を、分野ごとの特性と問題点を考慮に入れながら、初期仏教、瑜伽行唯識思想、中観思想、仏教論理学・認識論、インド密教、およびチベット仏教に関する総計およそ 500 を数える主要な術語に適用します。

【期待される成果と意義】

本研究の成果により、難解な、あるいは誤解の少なくない仏教用語に関する、信頼度の高い現代訳語と、それを裏づける主要な用例集が公にされます。

この成果は、関連する哲学思想や語学・文学の領域にも大きな影響を与えた仏教用語および仏教思想に関するより的確な理解を可能にします。

このプロジェクトの成果は Web 上で公開する予定で、専門家のみならず、仏教思想に関心をいだく多くの人々に貴重な学習上のツールを提供することになります。

また、対象となる資料はインド語、チベット語、漢語等の複数の言語に跨るため、内外の関連分野の中でも、とりわけ日本のインド学仏教学界に期待されるところが大きい研究成果といえます。国際的な研究協力の拠点として、建設的な意見・情報交換をすすめていながら、期待に応えたいと考えています。



Abstract of the Research

【Purpose and Background of the Research】

An enormous number of technical terms appear in Buddhist scriptures and treatises. While based on Sanskrit and Middle Indo-Aryan languages, many of these were translated into other languages, especially Chinese, and became established as terms that have been widely accepted in the world of East Asian Buddhism down to the present day.

Nonetheless, an attempt to reexamine the meaning of these many terms in their respective contexts and then gather together the wisdom of many experts with a view to bringing these terms to life in the contemporary languages might be a quite important task.

The objective of this research is to take up for consideration the important scriptures and treatises that were composed in India, extract the definitions (or rules about usage) of terms used in these works, and, as well as comparing these, establish standard translations, on the basis of which one could raise some substantial questions directed towards a full-scale examination by academia as a whole.

【Research Methods】

This project is carried out by the research team composed of a chief investigator, A. Saito, and six research scholars who have their own allotted tasks. The research is further supported by several related scholars as well as graduate students belonging to the each institute of the above research members.

As a methodological example, the chief investigator published in 2011 a booklet entitled *Bauddhakośa : A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences*, in which the seventy-five elements (*dharma*) of Sarvāstivāda in the *Abhidharmakośabhāṣya* and related works were examined in detail. The above preliminary research was executed by the effective use of XML (Extensible Markup Language).

This project applies the above method to the other Buddhist terms, approximately 500 in total, related to the fields of Early Buddhism, Yogācāra, Mādhyamika, Buddhist Logic and Epistemology, Esoteric Buddhism, and Tibetan Buddhism.

【Expected Research Achievements and Scientific Significance】

The research project provides us with a reliable modern Japanese-English glossary of Buddhist terms as well as illustrative sentences in which those terms are used.

The result of this research enables us to have pertinent understanding of Buddhist terms and thoughts which have long influenced the language, literature, philosophy, and culture in general in East Asia.

Besides, the research result can be shared by many people interested in Buddhist thoughts since it is opened to the public not only in a booklet but also in the Website.

It could be also supposed that with an international cooperation, the research is highly expected to complete in Japan since the works primarily or secondarily related are written in different languages such as Sanskrit, Pāli, Tibetan, Chinese and Japanese.

本プロジェクトに携わる研究者

研究代表者：

斎藤 明（東京大学人文社会系研究科・教授） 「総括＋インド大乘仏教経論」

研究分担者：

榎本 文雄（大阪大学大学院文学研究科・教授） 「初期仏教関連用語」

室寺 義仁（滋賀医科大学・教授） 「初期瑜伽行派関連用語」

佐久間 秀範（筑波大学大学院人文社会科学研究科・教授） 「瑜伽行唯識思想関連用語」

宮崎 泉（京都大学大学院文学研究科・准教授） 「インド中観思想およびチベット仏教思想関連」

岩田 孝（早稲田大学大学院文学研究科・教授） 「仏教論理学・認識論関連用語」

桜井 宗信（東北大学大学院文学研究科・教授） 「インド密教関連用語」

連携研究者：

渡辺 章悟（東洋大学文学部・教授）

下田 正弘（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）

桂 紹隆（龍谷大学文学部・教授）

久間 泰賢（三重大学人文学部・准教授）

石井 公成（駒澤大学仏教学部・教授）

末木 文美士（国際日本文化研究センター・教授）

養輪 顕量（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）

丸井 浩（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）

研究協力者：

Charles Muller（東京大学大学院人文社会系研究科・特任教授）

Paul Harrison (Stanford Univ.)

ツルティム・ケサン（大谷大学名誉教授）

苦米地 等流（人文情報学研究所・専任研究員）

何 歆歆（中国社会科学院）

加藤 弘二郎（斎藤研究班）

石田 尚敬（斎藤研究班）

一色 大悟（斎藤研究班）

新作 慶明（斎藤研究班）

崔 境眞（斎藤研究班）

畑 昌利（榎本研究班）

Jonathan Silk (Leiden Univ.)

永崎 研宣（人文情報学研究所・所長）

叶 少勇（北京大学）

高橋 晃一（斎藤研究班）

堀内 俊郎（斎藤研究班）

松田 訓典（斎藤研究班）

得能 公明（斎藤研究班）

鄭 祥教（斎藤研究班）

河崎 豊（榎本研究班）

名和 隆乾（榎本研究班）

古川 洋平 (榎本研究班)

岸 清香 (佐久間研究班)

釋 妙玄 (佐久間研究班)

横山 剛 (宮崎研究班)

三代 舞 (岩田研究班)

真鍋 智裕 (岩田研究班)

佐藤 晃 (岩田研究班)

佐々木 亮 (岩田研究班)

菊谷 竜太 (桜井研究班)

研究会等活動報告

2011 (平成23) 年10月8日 (土) 第1回研究会 (平成23年度 第1回研究会)

16:00 ~ 20:00 (於 東京大学山上会館 地下002会議室)

議題：昨年までに完了した「仏教用語の現代基準訳語集構築に向けての総合的研究」の成果報告、上記研究に基づくウェブ語彙集の解説、バウッダコーシャ作成の基本方針の説明、研究分担者の作業分担の確認、次回研究会までに進めておくべき作業の指示

2012 (平成24) 年3月14日 (水) 第2回研究会 (平成23年度 第2回研究会)

16:00 ~ 18:30 (於 東京大学山上会館 地下002会議室)

議題：本年度内の活動の総括的報告と来年度の活動予定についての説明、各研究班の活動実績の報告

2012 (平成24) 年7月14日 (土) 第3回研究会 (平成24年度 第1回研究会)

14:00 ~ 18:00 (於 東京大学仏教青年会 ホールA)

議題：各研究班の報告、「ニューズレター」刊行に関する検討、および研究発表

研究発表：ツルティム・ケサン「ロンドルラマによる因明関連術語の規定をめぐって」

(参考資料：「ロンドルラマ著『量評釈』など因明所出の名目」)

2013 (平成25) 年3月16日 (土) 第4回研究会 (平成24年度 第2回研究会)

16:00 ~ 20:00 (於 東京大学山上会館 地下002会議室)

議題：各研究班の報告、「ニューズレター」刊行に関する検討、および研究発表

研究発表：斎藤 明「Avalokiteśvara における *avalokita* の意味と由来について」

研究会等活動予定

2013 (平成25) 年7月13日 (土) 第5回研究会 (平成25年度 第1回研究会)

16:00 ~ 20:00 (於 東京大学山上会館 地下002会議室)

2013 (平成25) 年11月30日 (土) 公開シンポジウム

15:00 ~ 18:00 (於 東京大学山上会館 2階大会議室)

研究報告①

lakkhaṇa, rasa, paccupaṭṭhāna, padaṭṭhāna

(於 平成22年度第2回研究会 【平成23年3月22日開催】)

畑 昌利 (大阪大学文学部助教代理)

榎本班では、初期仏教関連用語の現代基準訳語集および定義的用例集を構築する作業の一環として、南方上座部の註釈家ブッダゴーサが物した各用語の定義的記述を資料の一部として用いるべく、用例収集を行った。そしてブッダゴーサが語釈を行う際に多用する lakkhaṇa 等の 4 語の語義確定に関して、Visuddhimagga, Paramatthamañjūsā, Paṭisambhidāmagga-aṭṭhakathā の記述を確認した。その結果、これら 3 文献にて施される説明は互いに矛盾するものではなく、相互補完的な内容を含むことが判明した。そこで今回は、4 語に対してもっとも簡潔で直接的な説明を与えている Paṭisambhidāmagga-aṭṭhakathā の記述を提示し、これら 4 語の訳語決定の手掛かりとする。

● Paṭisambhidāmagga-aṭṭhakathā II, p. 14, The Pali Text Society

lakkhaṇādisu hi sabhāvo vā sāmaññaṃ vā lakkhaṇaṃ nāma. kiccaṃ vā sampatti vā raso nāma, upaṭṭhānākāro vā phalaṃ vā paccupaṭṭhānaṃ nāma, āsannakāraṇaṃ padaṭṭhānaṃ nāmā ti veditaḥham.

「というのも、lakkhaṇa 等の中で、lakkhaṇa というものは、本性、あるいは共通性である。rasa というものは、働き、あるいは達成である。paccupaṭṭhāna というものは、侍立する様相、あるいは結果である。padaṭṭhāna というものは、直接の原因である、と知られるべきである。」

● Paṭisambhidāmagga-aṭṭhakathā の説明

- 1 lakkhaṇa ⇒ 1-a 本性 (sabhāva), 1-b 共通性 (sāmañña)
- 2 rasa ⇒ 2-a 働き (kicca), 2-b 達成 (sampatti)
- 3 paccupaṭṭhāna ⇒ 3-a 侍立する様相 (upaṭṭhānākāra), 3-b 結果 (phala)
- 4 padaṭṭhāna ⇒ 4 直接の原因 (āsannakāraṇa)

以上をもとにし、さらに Visuddhimagga, Paramatthamañjūsā の記述を考慮に入れた結果として、暫定的ながら以下のように訳語を決定している。思わぬ過誤があるかもしれぬ故、識者のご教示を乞う次第である。

● 暫定訳

- 1. lakkhaṇa ⇒ 「特性」
- 2. rasa ⇒ 「本質的な働き」
- 3. paccupaṭṭhāna ⇒ 「附帯する様相」
- 4. padaṭṭhāna ⇒ 「直接因」

研究報告②

XMLの活用について考える

高橋晃一(東京大学特任研究員)

はじめに

XMLはExtensible Markup Language の略称で、直訳すれば「拡張可能なマークアップ言語」を意味しています。XMLは人文学研究まで含めた広い範囲で応用が期待されているデータ形式であり、『パウダコーシャ』もこのXMLを用いて術語の定義や用例に関する情報を整理しています。

しかし、一般的には「マークアップ言語」自体が耳なれない言葉かもしれません。また、アルファベットの略号で「XML」と言われても、なんだかとても難しそうだという印象を抱かれることかと思えます。ですが、XML自体はそれほど難解な技術ではありません。「XML自体」と言いましたのは、XMLは単独では情報のコンテンツの集合体であって、書式やレイアウトを持っていないテキスト文書だからです。(誤解があると

いけません、XMLはアプリケーションの名称ではありません。あくまでデータ形式です。) そのため、実際に見やすい形にするためには、XMLとは別な技術が必要になります。この段階ではやや難易度が上がるのは事実です。そのため、ワードなどのアプリケーションに慣れている人にとっては、煩わしく感じられるかもしれません。ワードなどでは文書を作成しながら、フォントの大きさや字体を変えることができるので、レイアウトとコンテンツを分けて扱う必要がないからです。しかし、データ管理という観点からは、XMLの方が優れていることは間違いありません。今回はこれまでマークアップ言語に触れたことがない人向けに、XMLのイメージをつかんでいただくために、簡単な解説を試みます。

印仏学会パネル発表風景



マークアップ言語の概要

XMLの詳細な仕様はW3Cによって策定されており、ホームページで見ることができます (<http://www.w3.org/standards/xml/>)。ただし、そこでの説明はやや専門的であり、そもそも「マークアップ言語」というものに触れたことがなければ、理解することも容易ではないでしょう。したがって、XMLを解説する前に、まずマークアップ言語について簡単に説明しておきます。

マークアップ言語として最もよく知られているものはHTML (Hyper Text Markup Language) でしょう。これはウェブサイトを作成する際に用いられているマークアップ言語で、タグと呼ばれる情報をテキストの中に埋め込むことができます。タグには開始タグと終了タグがあり、それぞれ“<”と“>”の記号で示されます。例えば、段落を表す<p>~</p>や、見出しを表す<h1>~</h1>などがタグです。~には文章や単語などの情報が入り、タグで囲まれた範囲は「要素」と呼ばれます。例えば、いま読んでいるこの文章であれば、次のようにタグ付することが可能です。

```
<h1>XMLの活用について考える</h1>
<h2>はじめに</h2>
<p>XMLはExtensible Markup Language の略称で、直訳すれば「拡張可能なマークアップ言語」を意味しています。XMLは人文学研究まで含めた広い範囲で応用が期待されているデータ形式であり、『バウッダコーシャ』もこのXMLを用いて術語の定義や用例に関する情報を整理しています。</p>
<h2>マークアップ言語の概要</h2>
<p>XMLの詳細な仕様はW3Cによって策定されており、ホームページで見ることができます (http://www.w3.org/standards/xml/)。…</p>
```

パソコンでメモ帳などを起動し、上記の例をそのまま書き取り、適当な名前を付けて、拡張子を“.html”としてテキストファイルの形式で保存してください (例：practice.htmlなど)。それをInternet Explorer やFirefoxなどのブラウザで開くと、適宜に書式を当てられた状態で見ることは可能です。(ブラウザでのファイルの開き方は、例えばWindows7であれば、当該のhtml文書を選択して右クリックし、「プログラムから開く」で任意のブラウザを選択します。)

HTMLファイルはテキスト形式で保存されるため、データ自体は書式を持ちません。イタリックやボールドで表記するためには、<i>やというタグを付けるか、CSSという別な形式の文書を用意し、書式を設定することになります。(これらに

ついては初心者向けの入門書やウェブサイトが数多く公開されているので、ここでは詳述しません。) こうした記述法はワードなどのアプリケーションソフトになれていると煩わしく感じられるかもしれませんが、利点も多いのです。やや専門的な話になりますが、タグには「属性」を設定することができ、IDを付けてタグで囲まれた情報(要素)を個別に特定したり、グループ分けすることもできます。こうすることで、より細かく文書全体を制御することが可能になります。「データの管理」という観点からは、ワードなどよりも利便性が高いと言えます。

XMLとは？

すでに述べましたように、XMLはマークアップ言語の一種であり、HTMLと同様にタグをテキスト文書内に埋め込んでいきます。ただし、XMLの場合、使用できるタグがあらかじめ決められていません。言い換えれば、タグは文書の作成者により独自に、自由に設定することができます。そのため、HTMLに比べて「柔軟な」マークアップ言語とも言われます。例えば、今読んでいるこの文章はXMLで次のようにタグ付し、整理することができます。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<論文>
  <題名>XMLの活用について考える</題名>
  <小節>
    <節名>はじめに</節名>
    <段落>XMLはExtensible Markup Language の略称で、直訳すれば「拡張可能なマークアップ言語」を意味しています。XMLは人文学研究まで含めた広い範囲で応用が期待されているデータ形式であり、『バウッダコーシャ』もこのXMLを用いて術語の定義や用例に関する情報を整理しています。</段落>
  </小節>
  <小節>
    <節名>マークアップ言語の概要</節名>
    <段落>XMLの詳細な仕様はW3Cによって策定されており、ホームページで見ることができます (http://www.w3.org/standards/xml/)。…</段落>
  </小節>
</論文>
```

このように、タグに日本語を用いることもできますが、日本語や漢字は必ずしもすべてのコンピュータで処理できるわけではないので、一



印仏学会パネル発表風景

一般的にはアルファベット表記が望ましく、また文書を保存する際の文字コードもUnicodeを選択しておく方が無難です。さて、上記の文書のタグをアルファベット表記にした場合、例えば次のように表現することになります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<article>
  <title>XMLの活用について考える</title>
  <section>
    <title>はじめに</title>
    <p>XMLはExtensible Markup Language の略称で、直訳すれば「拡張可能なマークアップ言語」を意味しています。XMLは人文学研究まで含めた広い範囲で応用が期待されているデータ形式であり、『バウッダコーシャ』もこのXMLを用いて術語の定義や用例に関する情報を整理しています。</p>
  </section>
  <section>
    <title>マークアップ言語の概要</title>
    <p>XMLの詳細な仕様はW3Cによって策定されており、ホームページで見ることができます (http://www.w3.org/standards/xml/)。…</p>
  </section>
</article>
```

さらに、<p>~</p>で囲まれた要素内にタグを埋

め込むこともできます。例えば、次のようなタグ付けが考えられます。

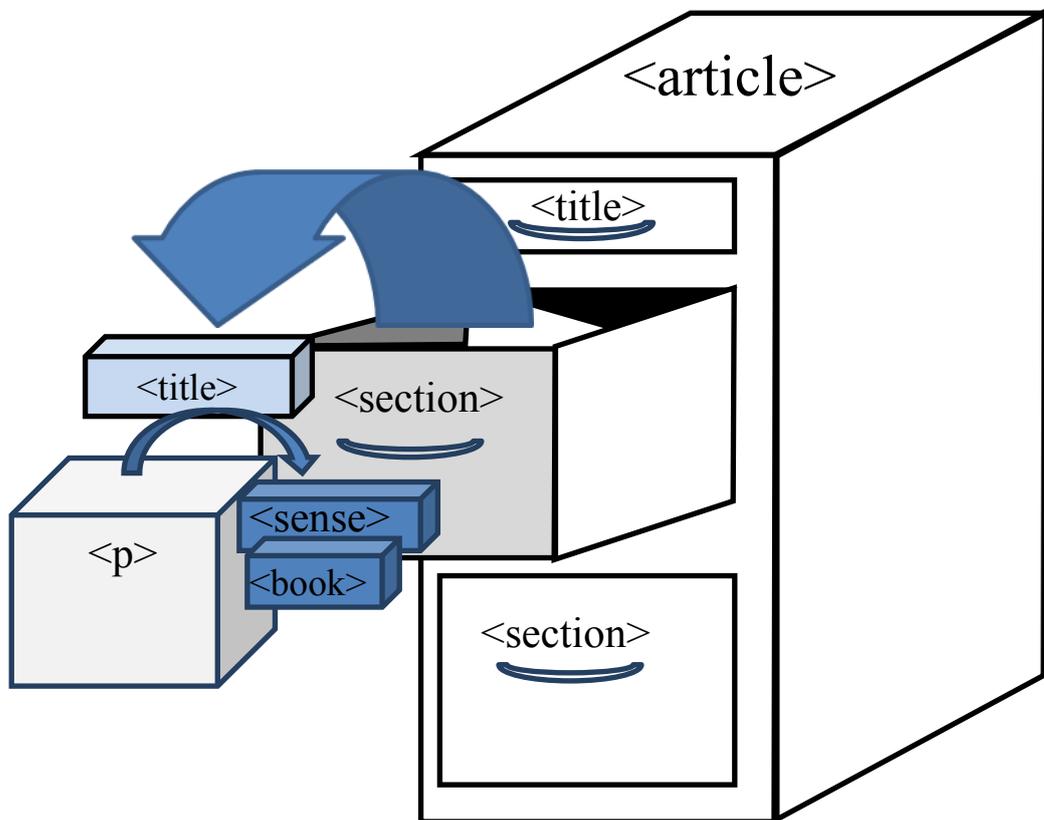
```
<p><name>XML</name>は<full_name>Extensible Markup Language</full_name>の略称で、直訳すれば「<sense>拡張可能なマークアップ言語</sense>」を意味しています。XMLは人文学研究まで含めた広い範囲で応用が期待されているデータ形式であり、『<book>バウッダコーシャ</book>』もこのXMLを用いて術語の定義や用例に関する情報を整理しています。</p>
```

XMLでデータを作成する際に特に注意すべき点は、「要素は必ず開始タグで始まり、終了タグで閉じなければならない」ということです。この点はHTMLよりはるかに厳密であり、これが守られていない場合、ブラウザはXML文書を読み込むことができません。はじめのうちは理解しにくいかも知れませんが、タンスの引出しの中に箱が入っている状態をイメージすると分かりやすいと思います。一番大きな要素である<article>をタンス本体とし、<title>という「引出し」が一つ、<section>という「引出し」が二つあるとします。<section>という引出しには<title>と<p>という「箱」が入っており、さらに<p>の中には<name>、<full_name>、<sense>、<book>などの「小箱」が収まっていると考えま

す。図示すると次のようなイメージになります。

引出しごとに中味が整理され、中の箱も内容ごとにきちんと分けられていれば、必要なものに容易にたどり着けることはご理解いただけると思います。もちろん、XMLは実際にはタンスではありませんので、手で中味を取り出すわけ

にはいきません。これには初めに述べましたように、情報処理の技術が必要になります。これらは順を追って学習するしかありませんが、そうした技術を身に付けたときに、人文学の研究成果に新たな表現技法が加わることは疑う余地がありません。『バウダコーシャ』はそうした実例の一つなのです。（終）



活動報告

第61回日本印度学仏教学会学術大会パネル発表報告 (平成 22 年 9 月 11 日開催 於 立正大学)

仏教用語の現代語訳と定義的用例集 (バウツダコーシャ) の構築に向けて

代表 齋藤 明

1. 問題提起

二千四百年を超える歴史を刻んできた仏教にとって、多くの術語の意味をそれぞれの文脈において再検証し、そのうえで学界の衆知を結集して、これらの術語を現代語として蘇生させるという試みはきわめて重要な意味をもつ。仏教思想をより身近で開かれたものにするのが期待される今日、仏教術語に関する定義的ともいえる主要な用例を根拠として提示しつつ、現代語(日本語・英語)への基準的な訳語集を策定することの意義は大きい。

本パネルは、このような現代的な課題に挑戦することの意義を認識する 5 人のパネリストが、それぞれの研究成果を踏まえた上で、初期仏教、有部アビダルマ、唯識、中観、仏教論理学における代表的な術語を例として取りあげ検証した。いずれの発表も科学研究費補助金・基盤研究(A)「仏教用語の『日英基準訳語集』構築に向けての総合的研究」(平成 19-22 年度)による研究成果の一部であるが、それぞれの発表につき忌憚のない質疑応答と意見交換を行った。

2. 各発表要旨

2.1 高橋 晃一 (東京大学特任研究員)

「五位七十五法の現代語訳と定義的用例に関して」

高橋氏は、当該研究が採用した XML 形式の特徴と利点をまず説明した。XML とは、Extensible Markup Language (拡張可能型情報記述言語) の略称で、約 10 年前に登場した比較的新しいコンピュータ言語だが、柔軟な構造と汎用性に

すぐれ、今日では情報処理の分野で広く利用されている。多様な言語を扱う必要があり、また諸種のデータベースや Web 上の辞書類との連携も求められるインド学仏教学の分野では、大きな効力を発揮することが期待される。その上で氏は、有部アビダルマの五位七十五法に関する入力データの複数例をサンプルとして齋藤研究班による成果の一端をスクリーン画像を通して解説した。

2.2 畑 昌利 (種智院大学非常勤講師)

「初期仏教関連の用語をめぐって」

畑氏は *avyākata* および *amarāvikkhepa* の両語を例として取りあげ、初期經典における用例とその注釈文献が与える解釈を基礎として現代語訳を試みることの意義とともに、特有の難しさを詳説した。*avyākata* については、4 種類 10 項目等からなるいわゆる形而上学的な質問に対するブツダの不回答(無記)を示す用例のほか、善・悪に関して区別されないという趣旨からの「不確定の」という意味での用例、ならびに未来の予言(授記)に関して「予言されていない」という意味での用例を区別する必要のあることを指摘した。

2.3 齋藤 明 (東京大学教授)

「プラパンチャ(戯論)とは何か—ナーガールジュナの解釈を中心として—」

齋藤は、『中論』における *prapañca* の(動詞形を含む)全用例とともに、その代表的な 2 例(XVIII. 5,9)に関する諸注釈者の解釈を示し、



印仏学会パネル発表風景

ナーガールジュナが意図する同語の意味内容を考察した。『中論』の用例をふまえ、注釈者の解釈を参照するかぎり、プラパンチャとは、「有」「無」や「常」「無常」、あるいは「生」「老」「死」等の対概念によっては本来捉えられない真実 (=空) や縁起を、それらの対概念に執着して捉える心的なはたらきであり、煩惱の根元に位置する。「空」を説くことの目的は、このプラパンチャを静め、それによって煩惱、さらには煩惱を原因とする苦悩からの解放 (=解脱) を目指すことにある。このような意味で、ナーガールジュナにとってプラパンチャ (概念的細分化・多様化) とは、概念によって対象を細分化する誤った心的なはたらきを指すとともに、そのように誤って細分化された対象の様々な特徴を表す言葉や概念そのものをも意味するといえる。

2.4 室寺義仁 (高野山大学教授)

「大乘経を典拠とする「唯心」と「唯識」の用例提示に向けての試案」

室寺氏は *cittamātra* (唯心、心のみ) および *vijñaptimātra* (唯識、表象のみ) の両語を例として取りあげ、それらの初出あるいは典拠となる大乘經典と、それを典拠として引用する論書を挙げながら詳論した。前者の「唯心」説については『般舟三昧経』が初出と考えられ、『十地

経』の経句が『唯識二十論』の冒頭において唯心説の典拠として引用される。一方また「唯識」説の初出は『解深密経』であり、これを『瑜伽師地論』(撰決摂分中菩薩地) や『撰大乘論』が典拠として引用するという関係にあることを詳説した。

2.5 久間泰賢 (三重大大学教授)

「仏教論理学関連用語の現代語訳をめぐって」

久間氏は、仏教論理学関連で採録予定の術語一覧を提示したうえで、*pramāṇa* (正しい認識 (手段)) を例に、種々の問題を詳論した。伝統的な「量」の訳語、「認識」「知識」「(真)知」等の複数の現代語訳例、*-ana* 接尾辞が行為・状態のみならず手段をも表すこと、「正しい」という形容辞のもつ意味とその問題点、さらにまた主要な用例をいかなる範囲の文献から引用することが相応しいか等々の問題を詳説した。

3 質疑応答

今年度大会のパネルでは 2 時間半に時間が延長されたこともあって、質疑応答と議論も一手厳しい質問や指摘も含め一かなり密度が濃かった。質問は、現代語訳をめぐると諸問題に関するものが多かったが、本研究の意義と方法に関する忌憚のない質問や建設的な意見も寄せられ、主催者としてはかなり収穫の多いパネルであった。

(【『印度学仏教学研究』59-2, 2011, pp.(271)-(272). より転載】)

Newsletter No.2 **March, 2013**

The Creation of Bauddhakośa:
A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences

【Grant-in-Aid for Scientific Research(S)】



http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html

Bauddhakośa **プロジェクト事務局**

〒113-0033 東京都文京区本郷 7 丁目 3 番 1 号
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
インド哲学仏教学研究室内
E-mail: b_kosha@l.u-tokyo.ac.jp